

ことを美海の家で電話で伝えたのだ。

「おはようございます。この度はすみませんでした。ご迷惑をかけてしもうて」

そう言って、雪乃と節子は、敦士の家玄関に立つ。どうぞ、と気まずく佳代が居間に案内する。そこには、弘章と渚もいた。

渚は前の夜、弘章からの連絡を受け、朝一番の船でそっちに行くから、と急遽駆けつけていたのだ。

「はじめまして。私、立花渚といいます。」

初対面となる渚は、すっと立ち上がりあいさつをするものの、面識のない雪乃と節子にとっては、特に関心を寄せる対象ではなかった。

「五月にこちらに研修で来たとき、美海ちゃんと弘章くんに出て、それ以来いろいろとお世話になっていました。昨日の夜、弘章くんから連絡があって、心配になって、朝一番の船で来ました」

「ごめんなさいね、遠いところ」

渚の隣で弘章が恐縮しつつも、釈然としない表情で座っていた。前日、敦士から聞かされた「澤村雄一」の件が引っかかったままであり、その真意がはっきりするまでは、二人も自分も納得できるはずがなかったからだ。

「美海ちゃん、昨日の夜、泣きもって家に来て。詳しいことは分らんけど、とにかく無事で良かったわ」

敦士の母が言ったか言わずかで、美海を引き連れて敦士が隣の部屋から入ってきた。佳代の隣に敦士が座る。その隣に美海と弘章、そして渚が座る。美海の正面に雪乃と節子が座り、全員が揃った。

敦士も美海も、ばつが悪そうな表情だ。しかし渚の姿を見つけた美海は、さすがに申し訳なさそうに軽く会釈をした。

「あ、やっぱり敦士くん」

渚が声を発した。

「五月に来たとき、そこの港で会ったよね。朝早くに」

みんなが渚に注目したあと、敦士に視線を寄せる。

「霧の深い日」

ああ、あの日、と言う敦士と渚を見比べながら、思い出したように敦士の母もハッ

として、あのときの、と呟く。

「敦士くん？健一によう似とる」

節子の言葉に、「健一？それ誰？」と敦士が怪訝な表情を浮かべる。隣にいた佳代から声がかかる。

「敦士のお父さんや」

えっ、と思ったのは敦士だけではなかった。美海も、弘章も同じだった。

「あっくんの父さんいうて、私の父さんじゃないん？」

呟くように美海が言う。

「昨日はごめんなさいね、美海が」

父親の話にふれて切り出した節子の言葉に、その場に居るみんなが、あとに続く決意を待った。

「いつかは言わんといかんと思ってたけど。敦士くんにも、美海にも。佳代さん、ごめんなさいね」

いいえ、と応じる敦士の母、佳代に、自分たちの知り得ない祖母との関係を、敦士も美海も、弘章も感じ取る。

「これは本当は、私とおじいさんが始末せんといかんことやったんや。そやから敦士くんは、お母さんのこと、悪く思わんとしてな。佳代さんも本当にこの通り、今の今までごめんなさい」

そう言って、深々とぬかずいた。いいえもうそれは、と佳代も応じる。

「美海にも今まで黙っというて、ごめんなさい。お母さんにも苦しい思いをずっとさせてしもうた。雪乃さん、ごめんなさい」

隣に座る雪乃にもぬかずく。節子の一方的な謝罪に、場の空気が落ち着く。

「さて、どっから話したらええんか。敦士くん、美海、二人はね、いところになるん」

えっ、とまなざしを見開き、二人して視線を交わす。

「けどお父さんはひとりっ子やって……」

「美海、本当はお父さんにはお兄さんがおったんや。それが、敦士くんのお父さん」

「あっくんと私は、いところ——」

「そう、二人はいところになるし、敦士くんは、私の孫になるん」

驚いたように、敦士は祖母を見つめる。それまでの厳しかったまなざしが、少し和らぐ。

「あのポスターや本は、敦士くんの」

はい、と素直に頷く敦士の返事を聞きながら、部屋に貼られたポスターや、本棚に並べられた書籍を見渡す。

「お父さんもな、理科が好きな、本当に優秀な子やった。そやから高校を卒業したら、県外の大学に行きたかったんや。そやけどその頃おじいさんは島の運動に手とられて仕事が思うようにならんようになって。お父さんには高校を卒業したら、漁師を、家を継いでほしかったんや。それで大喧嘩になって。その頃、佳代さんとおつきあいしとったんよね」

確かめるように視線を移すと、恐縮したように佳代も会釈をする。

「おじいさんいうたら、それも大反対で。それならもう縁を切る、勘当やーいうてな。家を飛び出して。そんで佳代さんとお母さんと一緒になったん。そやけどな、そんな調子で出て行てしもうたもんやから、あとで子どもができた人から聞かされても、私も何にもしてやれんで……。ほんまにごめんなさい」

あらためて詫びる節子の寂しげな笑顔に、場の空気が沈む。

「ほんで結局、家には弟の、美海のお父さんの康二だけが残って。おじいさんは、お父さんが高校卒業したら、自分の後を継がせて漁師にしたんや。それから、お母さんと一緒になって、美海が産まれたん」

美海には知らないことばかりだった。そんな大事なことを、という思いもあった。が、そうならざるを得なかった状況も分からなくもない。それだけこの島が、家族が追い詰められていたということか、と察するが、それでも釈然としない。

「二人が産まれてすぐのことやった。風の強い時化た日に、漁師仲間から、兄さんの、健一の船が遭難したいうて連絡が入って、康二があわてて飛び出してしもて。みんなで止めたんやけど、きかんで。ほんで結局二人とも——」

「私は遭難したいう話だけで——」

母から聞かされていた美海の記憶に間違いはなかった。ただその話には、自分の知らないストーリーがあった。

なぜ、どうして——、という思いが、激しく渦を巻く。

「それからはおじいさん、お父さんたちの話は一切せんようになってな。きょうだいやおらんことにしとったから、余計に。」

そやけど、二人は本当に仲のええきょうだいやったんやで。康二はいつも健一にひ

っついて。何するんも一緒に。健一も面倒見のええ兄さんやった。康二が産まれたときやこ、ほっぺたを突っついて。そのたびに康二は嬉しそうに笑ろうて。健一もそれを嬉しそうにじっと眺めて。

大きになったら、おじいさんも運動の合間に二人を船に乗せて漁に出とったわ。

そやから健一があんなふうに家を出ていたあとは康二、本当につらそうやった。かわいそうなことをしてしもた」

我が子でありながら、思うように人生を描くことができなかった、息子二人の幼き思い出だけが、節子にとって唯一の慰めだった。

なら、どうして——、と美海の拳に力がこもる。

どうして、どうして——、と思うたびに、美海の目に涙が滲む。

それなら反対しなきゃよかったんじゃない——、と奥歯に力が入る。

「おじいさん、亡くなる前に、あっちに行ってもあいつら会うてくれるかなあいうて。みんなにすまんことしたいうて、何度も、何度も。私にも、すまんんだ、すまんんだいうて、泣きながら息を引き取っていったわ」

「それやったら——」

一つ大きく、美海が口にする。

「それやったら、初めから反対やん——」

悔しさが滲む。敦士ときょうだいでなかったことに安堵はした。しかし、もし、父に兄がいたことを知っていれば。もし、敦士がいとこだと分かっていれば——

「美海、敦士くん、ごめんなさい」と、涙声の節子が深々と頭を下げる。その義母をかばうように、雪乃が節子の背中に手をのせる。佳代も、どうか顔を上げてください、と声をかける。正面で座る母、雪乃。佳代の姿。そして敦士を見る。

母はどんな思いで生きてきたんだろう。

あっくんのお母さんは、どんな思いで生きてきたんだろう。

あっくんは今、どんな思いでいるんだろう。

そんなときだった。

「——母さんが、どんな思いで生きてきたんか、分かるか。俺らがどんな思いで生きてきたんか、あんたに分かるんか」

敦士の鋭い口調に場が凍りつく。同じ思いを抱いていたことを理解した美海は、自分の言葉を飲み込んだ。